

興福寺旧境内の調査(平城第625次)

2018年に落慶した興福寺中金堂は約300年ぶりに参拝者を迎えています。今回、中金堂の北西に位置する鐘楼と、五重塔・東金堂の西面を隔てる回廊の整備に必要な情報を得るための発掘調査を実施することとなりました。興福寺の縁起等をまとめた『興福寺流記』によれば、鐘楼は養老4年(720)8月以前に造営に着手し、天平宝字年間(757～765)には完成しています。興福寺の諸建物は、奈良時代創建ののち幾度も罹災し、そのたびにおよそ旧規を保って再建されたことが発掘調査でわかっていますが、鐘楼は、享保2年(1717)の焼失以後、再建されていません。いっぽう、五重塔は東金堂の造営着手に続いて光明皇后の発願によって建立され、天平2年(730)に完成したことが『興福寺流記』にみえます。現在の五重塔と東金堂は15世紀前半に再建され、国宝に指定されています。

奈文研では、興福寺の委託を受け2020年7月1日から発掘調査に着手しています。鐘楼では、遺存状態が良好な箇所が多く、基壇構造や建物構造の解明に重要な情報を得ることが期待できます。鐘楼は鎌倉期以降の絵図に袴腰を持つ姿として描かれていますが、この建築様式の成立について遺構から解明できる可能性があります。また、基壇裾西側を中心に焼土と炭が整地層を挟みながら幾重にも堆積しており、文献にみえる罹災と復興の履歴を示しているとみられます。五重塔・東金堂の西面を画する回廊については、回廊および門の基壇の東半が比較的良好に遺存していることから、門の規模、基壇構造の変化等について重要な知見が得られそうです。

今後の成果にご期待ください。

(都城発掘調査部 森先 一貴)



鐘楼基壇裾の焼土堆積(北西から)